

満州事変勃発の前後

——関東軍と関東憲兵隊

- 憲兵一年生 9 事変の前夜 11 柳条溝事件の勃発
13 板垣参謀一喝さる 15 張学良邸金庫爆破事件 18
溥儀の来満と馬賊の処刑 20

軍都千葉——時局に動く将校たち

- 妻に抵抗する「革新」の老將軍 24 酔っぱらい将校は
革新の闘士 35

戒嚴司令部の幕僚たち

——事件捜査の裏におどる

- 勢いづく清軍派幕僚 43 消えた不純幕僚の肅清 45
戒嚴参謀長を調べる 47 削除修正は困る 48 憲兵
は統帥権を侵している 50

暗黒裁判に思う

——つぶさに世情を体感して

- 暗黒裁判のかげに 52 真崎の無罪を祈る心 61

反軍のひととき——国民の目は正しい

- 国民の軍を見る目 71 組閣の大命宇垣に下る 73
痛憤に満つ組閣本部 75 陸軍省、参謀本部に突入
せよ 78 犯人は国民の声 80

奇妙な警察務——狂人二題

- 奇妙な依頼 82 狂人の説得 83 皇太后さまのご愛
顧をうけている 85 虚構の身边保護 88

万歳に沸く兵營街

——応召兵の二つの窃盗事犯

- 紙幣を抜きとった慶応ボーイ 91 女と兵隊 96

匪外に追放された男

——浅原健三を中心として

竜田丸船上の人 107 事件はデッチ上げか 109 事件の始末 112 浅原、上海に落ちつく 114 東条の執念 116 京都における石原 118 満州組の入びと 121

排英運動の高まり

——そのこれを動かすもの

まき起こされた排英旋風 125 排英をおおるもの 127 治安の危機 129 山本海軍次官の憲兵護衛 132 排英の火は消えず 134 事件の謀議 136 神戸における緊張 138 伊藤構想とその裏づけ 140

政治の中の憲兵——その反省と痛恨

政治と憲兵 143 原田男爵の軍事機密洩れ事件 146 憲兵政治という言葉 148 政治季節と憲兵 152 須摩

情報部長事件の真相 155 「政治革新」に酔った憲兵 158 政治弾圧に狂奔した憲兵 162 中野正剛の自決 164 重臣抑圧のための政局安定工作 168 軍の政治横暴と憲兵の責任 170

スパイ物語二題

——潜入スパイとデッチ上げスパイ
潜入スパイとその逆用 175 スパイされた男 181

南方占領地軍政に干与して

——現住民政策の反省など

軍政における民心の把握 188 憲兵の宿命を知る 198

戦争末期の朝鮮

——戦争が与えた傷痕は深い

戦争と総督政治 205 民族の心を無視した皇民化運動 208 朝鮮独立は民族の悲願 210 私の思い出・明城への旅 211

空襲と共に東京へ

——本土戦場化とその警察

本土戦場化へ 215 戦争遂行を阻むもの 218 志気沈
滞の軍需省 222 反戦和平の動き 225

殺人光線にからまる「科研」騒動

——大発明家か大詐欺漢か

技術大尉の告発 228 謎の男 230 水からガソリン 231
菅中將の言い分 233

敗戦と憲兵の終焉——その悲惨なる末路

聖断下る 236 降伏決定に至るまでの紛糾 238 八月
十五日 241 憲兵部隊の動揺 243 厚木進駐を前にし
て 246 憲兵の終焉 248

あとがき 252

憲

兵

——自伝的回想

あとがき

わたしは、昭和の初頭から十数年にわたる、あの激動の中に生きて来た。しかも、そのはげしい時代旋風の目である陸軍の中にいた。そこでは、時に、その嵐に身をまかせ、時に、その嵐に立ち向かうこともないではなかったが、それは所詮、蟬せみの車くるまに向かう空しいものでしかなかった。

しかしその始め、「憲兵」という襟章をつけて戦々兢兢としていたわたしも、戦争末期頃には、もはや一かどの「憲兵甲羅」を身につけて、威風いふう（？）あたりを払っていたかもしれない。いや、そうであったであろう。だが、半面、わたしはその職務柄、軍民の間にあつて、つねにいくばくかの民情に接し人間の機微に触れることの多かったのも、また事実である。

さて、敗戦後二十七年、「憲兵」といえば時代の権力悪の象徴として、国民の間に定着している。しかしこの長い歳月は漸くにしてその罵声ののしりを聞くことも少なくはなったが、それでも、茶の間のテレビドラマの映像にうつる「憲兵腕章」は、依然として権力悪の憎らしさを写し出している。われわれにとっては、残念なことではあるが、それも無理からぬ一面の過去の事実であり、それはまた、かつての軍国主義、軍閥の糾弾とともに、長く次代の国民に告発されつづけられることであろう。それもよい。これがこの世代の人々が素

朴にうけとめた憲兵の姿であり、また、それが、かつての憲兵に対する国民の評価である以上、われわれは甘んじて謙虚にこれをうけねばならぬものと思っている。

国民の告発といえば、近頃は旧軍における「残虐性」がきびしく取り上げられている。その旧軍における諸悪の告発も、時代の反戦風潮の中で、当面、自衛隊の増強に対する牽制策ともとられないではないが、しかし、事実としての「皇軍」の精神的頹廢は、率直にこれを認めなくてはなるまい。この場合、「監軍護法」などと威張っていた憲兵が、これから軍人、軍隊の「悪業」に、どれだけの抑制を加えたのかと、考えさせられている今日この頃である。ここでも、甚だ威力だった「軍事警察」が侮まれてならない。本来、憲兵の主任務は、この軍事警察であった。「憲兵令」は「憲兵は軍事警察を主務す」と教えていたのに、この軍事警察を忘れた憲兵は失格である。

なお、今日いろいろと考えさせることが多いが、しかし、それはそれとして、わたしはわたしなりにこの十六年を生きた。一軍人警察官として、また、一個の人間として、時に怒り、時に喜び、時に悲んだ、その十数年の公的生活は、それが、無力無能のものであつても、やはり、わたしにとっては、その半生の中味をなすものである限り、なかなか忘れがたいものである。

こうしたことから、わたしは、最近、「忘れ得ぬ警察におけるわたし」なるものを書きつづてみた。それは、みな、わたしの記録の中につよく刻みつけられているものであり、そこには、わたしの人間としての未完成、いや、欠点だらけのそれを立証するものば

著者紹介・大谷敬二郎（おおたに・けいじろう）
1900年 滋賀県生，1919年陸軍士官学校卒，1930年
憲兵科に転科，1938年東京憲兵隊特高課長，1944
年東京憲兵隊長，1945年東部憲兵隊司令官を歴任。
主要著作：『昭和憲兵史』（みすず書房），『憲兵隊
録』（原書房），『天皇の軍醫』（岡田出版社）
現住所・長崎県東彼杵郡佐佐木町中尾



憲兵——自伝的回想

昭和48年3月20日初版発行 ￥ 930

著者 大谷敬二郎 © 1973

発行者 菅 貞人

発行所 株式会社 新人物往来社

東京都千代田区丸の内3-3-1新東京ビルディング
電話代表（712）3931 播磨口座／東京151643

（印刷／文榮印刷・製本／小泉製本）

0023—40065—3306

かりで、まことにはずかしい次第であるが、あえて、ありのままに、これを書くことによつて、わたしの半生の「ざんげ」と反省の「あかし」ともしたいと思っているのである。今日、わたしもすでに七十五の齢を数え、静かにその余生を刻んでいる。かえりみて、その過去十数年にわたる公的生活の歩みは、まことに貧弱で空しいものであるが、「警察」という職にあつて、時代の流れに生きてきた一軍人の、つたないこの公的記録が、どれだけ時代の証言価値をもつものか、わたしにはこれを肯定する勇氣はないが、ただ、はかない昔ものがたりにすぎない、このわたしの公的生活における記念像が、幸いに多くの読者の眼を汚し、この時代に生きた一軍人の、そこでの人間関係のむずかしさを味読していただければと思うのみである。

なお、この記述には、事の正確を期するために、ここに登場していただいた多くの方々に、ご迷惑をかけ、また、わたしの先輩・僚友たちにも、甚だ礼を失したことの多いのを恐れている。謹んでご宥恕を願いたい。

また、本書の公刊にあたっては、ARRプロダクション社長本多喜久夫氏の絶大なるご支援によるもの、これまた記して厚く感謝の意を表するものである。

昭和四十七年十二月

著者